

山城ルネサンス「中世・桜田城物語」
～美濃に新たな学校づくり～

益田市美濃公民館

1 美濃地区の概要

(1) 沿革

美濃地区は益田市の最西部に位置し、四方を連山に囲まれ、小地区(平成31年1月末の人口335人、高齢化率50.1%)ながら、地味は肥沃で昔から美味しい米を産出している。児童数の減少から、平成26年春に美濃小学校が閉校に至った。

(2) 地区の歴史

美濃郡発祥の地で、古代には郡家が置かれていたと伝えられ、当時かなり繁栄していた地域であった。

中世には、益田氏と津和野の吉見氏の領地争いの歴史ドラマの舞台となり、江戸期には津和野藩政下で紙漉きが盛んに行われ、海産物を津和野城下に運ぶ主要街道筋でもあった。それぞれの時代の伝承や史跡が数多く残り、豊かで深い歴史が今なお息づいている。

(2) 伝統文化

田植え囃子保存会が二団体あり、秋祭りを華やかに彩る。盆踊り大会では伝統踊りとともに口説きが唄われ、中学生の後継者も育っている。

(3) 主な地域活動

(ア)ヒマワリ栽培

地元の女性グループが地域の人たちの協力で休耕田にヒマワリを栽培。開花時には地区外からも多くの見物客が訪れる。今年度の市景観まちづくり活動部門でグランプリを獲得した。

休耕田に栽培されているヒマワリ



(イ)美濃交流サロン

住民グループが4年前から地区内の元旅館を活用、地元グルメ等を味わう交流サロンを開催し、地区内外の人々の交流の場となっている。

2 事業の趣旨

地域の人たちの心の拠り所であった美濃小学校が閉校して以来、地区全体に不安感や危機感、諦めのような空気が漂い始めていた。

この閉塞感を払しょくし、地域の人たちが一体となって、新たなエネルギーを生み出し、地域の誇りと一体感を取り戻すことはできないか。そう考えたとき、美濃地区には古代から深くて豊かな歴史資源があり、この地区民共有の財産を未来志向に活かそうと、中心地にある中世の山城「桜田城」を切り口に、小学校に替わる新たなふるさと教育の拠点づくりの創出に取り組んだ。

3 具体的な取組内容

地元に残る中世の典型的な山城「桜田城跡」を核に、ふるさとの歴史を学び、誇りと愛着を持って地元を語るができる人材を育てるために、小中高生を含めた地区全体で次のような取組を行った。

(1) 地元の小中高生を含めた地区全体で山城の史跡調査を行った。



- (2) 山城の歴史を知り、活用策をみんなで作るワークショップを夏休みを利用して実施。
- (3) 山城を整備するための小学校の廃材活用のワークショップ「思い出再生プロジェクト」開催。



廃材活用のワークショップ

- (4) 雑木を一部伐採し、眺望を図る。
- (5) 自然木で遊歩道を整備。
- (6) 樹木調査を行い、樹名札を取り付ける。
- (7) 地区を見渡せる展望広場を設置。
- (8) 看板と史跡説明板を設置。



山城の雰囲気味わえるよう主郭部分の立木を整理

城跡の先端部分に展望広場を整備



桜田城登山道入口法面の雑木を整理

4 評価と成果

歴史を切り口にした取組が果たして地域の人たちに理解され、協力が得られるか…と不安があった。しかし取り掛かってみると、予想をはるかに超える人たちの作業奉仕や技術協力が得られたことは、今後展開される桜田城を活かした活動にも大きな弾みとなった。

また企画段階から地元の子どもたちほとんどの参加を見たのは、小中学校の理解と協力があったことだった。

遺構を壊さず、可能な限り小学校の廃材を活用することを基本に、多世代の多くの人たちが関わった取組は、自分たちが住んでいるふるさとをあらためて見つめなおす大きな第一歩となった。

こうして地域の人たちの間で生まれた連帯意識と一体感は、今後の地域づくりの「底力」となって活かされると思う。

小学校の解体工事が3カ月遅れたことから、廃材活用の計画については次年度に実施することとした。

5 今後の課題と見通し

子どもたちとアイデアを共に考え、多世代協力によって生まれた拠点づくりが、これから活かされるためには次のような点が課題である。

- ①今後の維持管理
- ②ふるさとの歴史学習の継続
- ③自治組織との連携
- ④ガイドの養成
- ⑤地元の歴史文化に関心を寄せ、活用するためのアイデア

止めようのない人口減少の中で、さまざまな挑戦を果敢に積み重ねていくためには、他のイベントとコラボさせながら、何よりも地域の人たち自身が“楽しい”と思える仕掛けが今後重要になってくるのだと思う。

(文責：主事 石橋 静子)

